中学生の「税についての作文」

大木町教育長賞

税金で支え合う

大木町立大木中学校
三年　梅　木　天　音

ある日、私は歯医者に行った。いつも通りの治療を終えて待合室に行くと、迎えに来てくれた母が待っていた。母は私を見るなり、「じゃあ帰ろうか。」と言って、すぐに出口へ向かった。そこで私はふと、お金はいつ支払うんだろうと疑問に思った。そういえば、これまで何度も歯医者で治療を受けたが、母が治療費を支払っているのを見たことがなかった。一体いつ支払っているのかと帰りの車の中で母に疑問を投げかけると、母はこう言った。

「中学生まで、治療費は無料なんだよ。」

私はその言葉を聞いて驚愕した。どうして無料なのだろう。では、誰が代わりに支払っているのだろう。

疑問に思った私は、インターネットで調べてみることにした。すると、私の住む町では「こども医療助成制度」という制度が実施されていることが分かった。この制度は、子どもの保健の向上と福祉の増進を図ることを目的として医療費の一部を支給するというものだった。この制度は、〇歳から中学三年生までが対象となっていた。つまり、私がこれまで受けてきた数々の治療は、全て無料だったのである。

では、私たちが支払わなくてよいのなら、一体何が費用を負担しているのだろう。そう思いさらに調べてみると、その支給の財源はなんと税金であることが分かった。国の支出の三分の一を占める「社会保障費」の一部のようだ。税金は、国民全員が納めている。私の健康は、国民全員によって保たれていた。そのことに気づいた私は、急に「税金」というものがとてつもなく偉大なもののように感じられた。

また、税金は国外でも使われていることが分かった。国の支出の中には「経済協力費」という、開発途上国の自立の支援を目的として使われている税金がある。これは、飢餓や貧困に苦しむ人々にとって大きな助けとなっている。税金は、国境を越えて人々の生活を支えていたのだ。

私は今まで「税金は役に立っている」と実感したことがあまりなかった。身近な消費税を例にあげるなら、商品の値段が上がってしまうので、むしろいらないとも思っていた。しかし今は、税金は生活をしていく上で必要不可欠なものだと思っている。税金は、気づかないところで私の命を守り、生活を支えてくれているのだと知ったからだ。今の私は、税金に対して感謝の気持ちでいっぱいだ。

私はまだ中学生であり、働いていないので自分で税金を納めることはできない。それでも、税金の大切さに気付くことができた。それを忘れずに、大人になって働き始めたらきちんと税金を納めようと思う。そして、今はまだ税金に支えられているだけの私だが、いつかは私の納めた税金で、誰かを支えてあげたいと思う。